

TOPICS

令和2年度青少年育成香川県民会議表彰式

7月3日、香川県庁において令和2年度青少年育成香川県民会議表彰式が行われ、青少年善行者(団体)として、手品サークル「メルシー笑クラブ」と農学部公認サークル「Lieto Ottimo」が表彰されました。

メルシー笑クラブは、2004年の設立以来続けている、香川県内の保育所、幼稚園、小学校、各福祉施設等での、手品・バルーンアート・ジャグリングを中心とするボランティア

活動が地域貢献活動への取り組みとして評価されました。

Lieto Ottimoは、身近な食材に注目し、各々の食材が持つ化学的組成や特性に注目した料理教室の開催を通じて、学内外で幅広く活動しています。「化学」や「科学」離れが進むとされる子どもたちを対象にした講演会や料理教室も開講しており、参加者へ自分たちの料理と科学の面白さを伝えるなど、時代の新しい課題に取り組んでいる点が評価されました。



県知事より表彰状を授与される Lieto Ottimo

メルシー笑クラブメンバー

香川大学学生表彰 (学長表彰式)

7月29日、学長応接室において学長表彰式を実施。学術研究活動や課外活動、社会活動において優秀な功績を取った学生・学生団体を表彰するもので、今回は経済学部西成ゼミに所属する大森皓太さん、天谷梨夢さん、西原歩祐翔さんが表彰を受けました。3人が、一般社団法人日本ホテル教育センター主催の第9回学生観光論文コンテストに提出した論文「自然資源と文化資源を融合させた国立公園の利活用～屋島山上ちようちんカフェという社会実験を通じて～」が、全国応募総数121編のなかから最優秀賞である観光庁長官賞を受賞した功績によるもの。

論文のテーマとなる「屋島山上ちようちんカフェ」は、文部科学省「地(知)の拠点事業」(COC事業)の一環として、2016年夏からスタートした期間限定の社会実験です。高松市の政策課題である屋島観光の再生をテーマに、自然資源である「屋島からの夕夜景」と文化資源である伝統工芸「讃岐ちようちん」を融合させた交流拠点が「屋島山上ちようちんカフェ」のコンセプト。本論文では4年間の来店者アンケートデータをもとに、自然資源と文化資源を融合させた交流拠点の有効性を実証した研究内容となっている点が高く評価されました。



左から西成教授、天谷さん、西原さん、見学長、大森さん、山神副学長

表彰式では、学長より表彰状と表彰盾が授与されました。表彰式後の懇談では、3人が活動報告や活動を通して学んだことなどを述べ、学長からは、今後も讃岐ちようちんを生かしたさらなる取り組みを期待していますとの激励の言葉が贈られました。

from International Office



ちきゅう見聞録



オーストラリアキャンベラ

大学院工学研究科 村井颯希
2019年8月から12月まで「トビタテ!留学 JAPAN 地域人材コース派遣留学生」としてキャンベラ大学に留学



私はUC(キャンベラ大学)で建築デザインについて学んでいます。キャンベラにあるHaig Parkがインターンシップとして参加しているプロジェクトのサイトになっています。ここに建築を提案して、公園の活性化に貢献しようというものです。



キャンベラにはUCとANU(オーストラリア国立大学)の2つの大学があります。私が留学で訪れたUCでは、他の都市では動物園に行かないと見ることのできないカンガルーやポッサムが、キャンパス内で頻繁に見ることができます。



国立科学技術センターQuestaconは、私のおすすめスポットの一つです。日本の技術提供により、オーストラリアとの共同事業で建てられました。家族や友達と楽しめる場所です。

read more



KADAIGEST 2020 8



「ことでの夏」場所：ことでん沿線



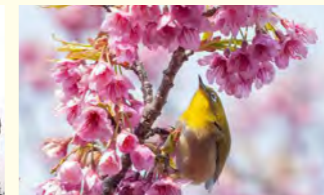
「打ち上げ花火」場所：神戸市猫山山頂



沖繩でスキューバダイビングに挑戦



剣山にて 景色がとってもきれいでした



「飲み足りない」場所：牧野植物園



「鈍輝」場所：高松空港



「MARINA」場所：シンガポール



「天空の鳥居」場所：高屋神社



ひまわりをバックにモデル撮影



RISE写真部で楽しく写真を撮りましょう!

香川大学創造工学部 RISE 写真部

私たちRISE写真部は、創造工学部公認の写真サークルです。月に1回程度の撮影会や依頼撮影を主に活動しているほか、不定期で写真展、昨年は海外撮影会も企画し、ニュージーランド、シンガポールに行き撮影を行いました。撮影対象は、風景・日常生活・スポーツ・ポートレートなど様々で、それぞれの部員がスマホや一眼レフで楽しく撮影をしています。今年は新型コロナウイルスの影響により、活動が難しい状況となっていますが、SNS上で写真展を開催し、多くの反響をいただくことができました。私がRISE写真部に入ったきっかけは、写真を通して様々な人との交流や地域貢献をしたいと思ったからです。

RISE写真部は、写真展や依頼撮影など、人と交流する機会を数多く設けています。写真展を見に来てくれた人からの励ましのメッセージや、撮影会で出会った地域の方々など、多くの出会いを通して自分自身も日々成長できていると実感しています。また、香川県内の各地を撮影していく中で、今まで知らなかった香川の魅力を再発見できるのもRISE写真部の良さであると感じています。RISE写真部は、創造工学部生のみならず、他学部生も多数在籍しています。少しでも興味のある方は是非一度ご連絡いただくと嬉しいです。香大で写真を撮るならRISE写真部へ!一緒に楽しく撮影しましょう!

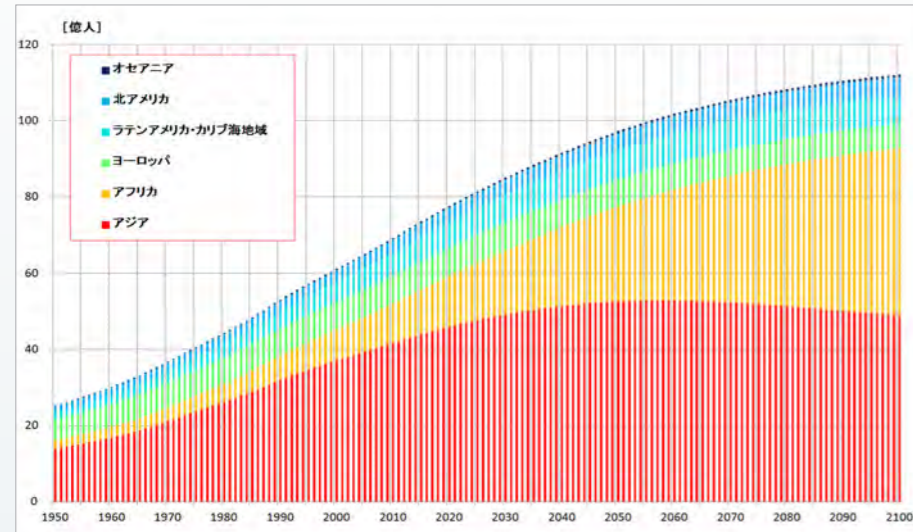
活動場所・創造工学部学生プロジェクト実験棟
活動時間・月1程度
部員数・13人
Twitter @RISE_photo_club
Instagram @rpc_kagawa.univ



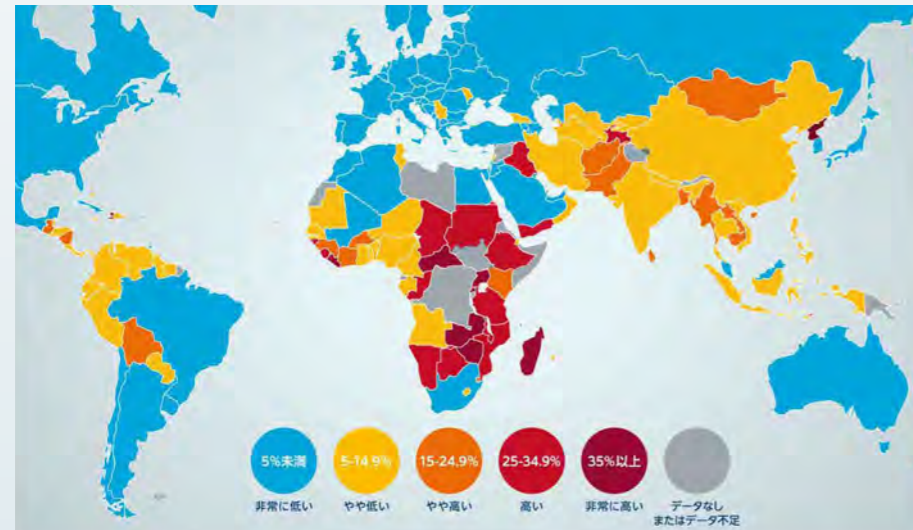
サークル歴3年 創造工学部 3年 木子慎太郎

間接的昆虫食が世界を飢餓から救う

料理科学イベント企画サークル **Lieto Ottimo**



世界の人口推移 (2015年現在) <https://graphic-data.com/page/geography/003.html>



世界の飢餓の現状 (2017年現在) http://www.sapia.jp/read/office_record/1810.html

世界の現状

「世界の人口推移」のグラフを見てわかるように世界人口は年々増加しており、今後も増え続けることが予想される。地域ごとに見ると、アジアやアフリカでの人口増加が著しくなっている。それを踏まえた上で「世界の飢餓の現状」のマップグラフを見てほしい。飢餓人口の割合が高い国々はアフリカを中心にアジア、南米北部に広がっている。飢餓や栄養不足に陥っている人は8億人を越えており、これは世界の9人に1人が飢餓や栄養不足に苦しんでいる計算になる。このまま飢餓人口の多い状態が改善されず人口だけが増えていくと、より一層飢餓人口の割合が高くなってしまふ。このような負の連鎖を絶ち切るためにはどうすればよいか？いくつかの解決策が考えられているなかで、Lieto Ottimoは昆虫食について取り上げている。

私たちは農学部生ならではの科学的な視点を活かして、地域の方々に食に関する興味や知識を持っていただけるようなイベントや企画を開催しています。

2019年度は、農学部収穫祭2019や香川大学博物館特別展などを通して「間接的昆虫食」を広める活動を行いました。「間接的昆虫食」とは、昆虫を家畜の飼料として与え、その家畜から得られた食料を人間が食べるといったものです。世界では人口増加に伴う深刻な食糧不足が危惧されています。そこで、現在注目されているのが「昆虫食」です。私達は新しい栄養源としての「昆虫食」の実現化に向け、その第一歩として「間接的昆虫食」の提案を行っています。そして、地域の方々に少しでも「昆虫食」について関心をもっていただき、身近に感じていただくことを目指しています。

農学部収穫祭2019では、来場者の方々に昆虫飼料ミルワームを用いた卵を使って作ったプリンと、用いていない卵を使って作ったプリンの食べ比べをしていただき、昆虫飼料に対する意識調査を行いました。その結果、多くの方が昆虫飼料を用いて作ったプリンの方が

おいしいと感じており、さらに70%以上の方から昆虫飼料への抵抗が以前より減ったとの回答を得ることができました。また、べっこう飴を来場者の方々の前で実際に作り、試食していただきました。べっこう飴が固まる仕組みや、砂糖の働き、砂糖の色の変化についても説明し、科学を身近に感じてもらう取り組みも行いました。

昆虫飼料の知名度をさらに上げるために、香川大学博物館で実施した特別展『新しい昆虫食の世界』では、ポスターやパネル、飼料サンプルの展示に加え、動画の作成や口頭説明を行いました。さらには来館者に向けて昆虫食に対するアンケートも行い、そこでは90%の方が間接的昆虫食に興味をもったという結果が得られました。また、直接的昆虫食に抵抗があるという回答をされていた方は、半数以上でしたが、昆虫飼料を用いて作った食材については80%の方から抵抗がないという回答を得ることができました。博物館の来館者の中には「昆虫食に対してのイメージが変わった」等の感想を寄せてくださった方もおり、活動に意義があったのではないかと感じます。



従来の昆虫食がなかなか受け入れられない原因として挙げられていた「昆虫食の見た目が私たちの食欲を減退させている」という問題を一挙に解決できるのが、今回私たちが紹介する新しい昆虫食、すなわち「間接的な昆虫食」である。「間接的な昆虫食」とは、昆虫を乾燥・粉砕したものを飼料として牛や豚、鶏などの家畜に与え、その家畜から得られた肉や卵などの食料を私たち人間が食べる、というものである。「間接的な昆虫食」では、人間が昆虫を直接食べるわけではなく、家畜によって昆虫が一旦消化されるため、昆虫の見た目に対する抵抗の軽減だけでなく、不衛生といった昆虫に対する負のイメージの緩和も期待されている。

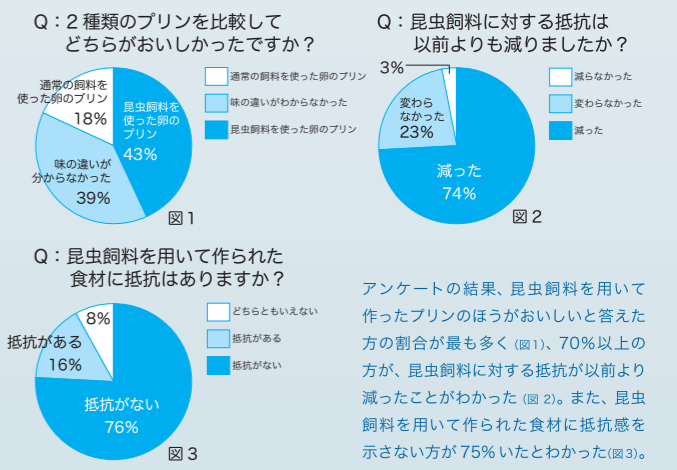
このような私たちの活動は、ラジオ・新聞などに取り上げられ、「間接的昆虫食」が世界を飢餓から救う存在になると注目されました。また香川県からも高く評価され、「令和2年度青少年育成香川県民会議の青少年善行者(団体)」として本サークルが表彰されました。家畜に代わる新たなタンパク質源とし

て注目されつつある「昆虫食」ですが、今後も活動を通して「昆虫食」に対する抵抗を軽減していくとともに、「昆虫食」をさらに多くの方に知っていただきたいと考えています。

農学部2年 福山ひなの



間接的昆虫食に対するアンケート (収穫祭2019)



アンケートの結果、昆虫飼料を用いて作ったプリンのほうがおいしいと答えた方の割合が最も多く(図1)、70%以上の方が、昆虫飼料に対する抵抗が以前より減ったことがわかった(図2)。また、昆虫飼料を用いて作られた食材に抵抗感を示さない方が75%いたとわかった(図3)。

※写真はイメージです